

松久朋林という仏師が「人々は仏を彫るとか仏を造るとおっしゃいますが、私たち仏師は仏を迎えるとか仏に出会うと言います」と言っておられます。日本を代表する仏師だけあってなるほどどうなつかされます。仏は最初から木の中におられて、仏師はただノミを動かして余計な木屑を払いのけるだけだとも言われます。これ以上木屑をのけたら仏の顔に傷がつくと思われるギリギリのところまで屑をとりつけてゆくことを彫ることなのだとされるのです。ところが無心になって木屑をとりつけた仏の姿は自分にそっくりだということです。仏像は時代や作者によって違った姿をとりますが、それは作者が自分自身の本心に出会っているのです。もともと仏像は仏教とともに 6～7 世紀に日本に輸入されました。それは当時、天災や疫病が相続いたためもはや既存の土俗宗教、つまり神道(呪術)では心許なくなり、外国の宗教を購入したというわけです。ところが島国であるこの国では他民族との交流が極端に少ないため仏教自体が独自の変容を遂げて行きます。特に付随する仏像等は上述したように仏教美術としてだけでなく、その後の日本人という精神形成に一つの成果を生み出すに至るのです。

「主なる神は人をエデンの園から追い出して、人が造られたその土を耕させられた」と旧約聖書は語ります。私たちが耕す土とは、私たち自身が造られたその土なのです。従って、土を耕してもものを造るとは、自分自身を耕して自分を造ることに他なりません。ものを造るとは、本来ものだけに留まらないで、自分を作ることにまで徹底すべきことなのです。ものを作ることによって作られてゆくのは人なのです。ものに人間が支配されるとよく言いますが、そのようなものは、ものとして未成熟なもの、実はものではないのでしょう。

イザヤ書 44 章は、第二イザヤによって人間が作ったものを礼拝してみても何の力にもならないと繰り返し語ります。インドで仏像が作られるようになったのはアレキサンダー大王が紀元前 324 年に西インド地方を占領してギリシャ文化をもたらして以来と言われます。当時の彫刻技術とは軍事技術でした。

それは戦争が神と神との戦いだと考えられていたからです。より高度な技術で神の像や神殿を刻むことは戦略的先端技術だったのです。バビロンの荘厳な宮殿のように各国とも競って立派な神の像を築いたのです。それは、自分と違う者を蹴散らし、侵略し、支配し、隷属させるための道具でした。当時、バビロン捕囚下にあつて辛酸を嘗めた第二イザヤは、そんなものは神ではないと宣言したのです。よく神の像を拝むのが偶像崇拜だと考えられがちですが、そんな単純なものではないのです。立派になりたい、強くて美しく豊かになりたいという願望を像に託して礼拝しても人は自由になれないのです。そのような自分の妄想で自分自身を救うなどということは決して出来ないのです。そうではなく、慰めや励まし、愛し合い仕え合うことの中にこそ自分自身と向き合う力が養われ、そんな他者との関わりの中にこそキリストとの出会いを求めて行くことが救いなのです。第二イザヤは53章で、むしろ神は貧しく無力になって仕える者になられたと言うのです。わたしたちも、まず自分がキリスト・イエスを迎える生活に励みたく願います。